

文章理解過程における日本語学習者の多義語の意味把握

一文脈の手がかりを用いて

石黒圭・鳥日哲・劉金鳳・布施悠子

本パネルでは、日本語学習者が多義語の理解や語義推測をどのように行っているのかを、和語の多義動詞、外来語の多義名詞、空間・数量を表す多義名詞を通して明らかにする調査結果を紹介する。

調査は例文に埋めこむ形で、パワーポイントのスライドを使ってランダムに示した。調査対象者は、中国語・ベトナム語を母語とする学習者各 40 名 (日本語のレベルと留学経験の有無で 4 グループに分類) と、比較のための日本語母語話者 10 名の計 50 名である。

語義推測にあたり、とくに注目したのは、文脈の手がかりの活用である。文脈の手がかりは、①語彙の手がかり (当該の語の語構成・表記)、②構造的手がかり (当該の語の前後の要素)、③内容的手がかり (当該の語を含む文の意味)、④環境の手がかり (調査時の周囲の環境) の四つに分け、それらをさらに下位分類し、4 類 13 種の分類によって、語義推測の過程を分析した。

(石黒一国立国語研究所, 鳥一国立国語研究所, 劉一中国無錫職業技術学院, 布施一国立国語研究所)

日本語教師教育・教師養成のエピステモロジーの多角的考察

—研究や実践を超えていく日本語教育者像—

嶋津百代・神吉宇一・北出慶子

近年、留学生等の急増に伴う日本語教師の不足，超党派による日本語教育推進議連の設置など，様々な課題が議論されている。日本語教育者の職はますます流動的で多様化している現場を抱え，人やことばといった不確実なもの扱うため，科学的知見や技術だけでは問題解決が十分に図れないという点で他の専門職とは異なる。そのような状況下で，日本語教師の役割や専門性やあり方も一元的に語れない。私たちは，実践の場におけるそれぞれの文脈を考慮したエピステモロジー＝思考の枠組みを，対話を積み重ねることによって捉え直し続ける必要がある。本パネルでは，日本語教育の専門職としてのアドバイザー業務，大学の日本語教員養成，大学院の日本語教師教育の事例を取り上げる。そして，既存の教育や研究の規範の背後にあるエピステモロジーに疑問を呈し，多角的な視点で日本語教師教育・教師養成の可能性を提示し，今後の日本語教育者像の広がりを検討したい。

（嶋津一関西大学，神吉一武蔵野大学，北出一立命館大学）

日本語教育における公共性の意味と課題

細川英雄・牛窪隆太・三代純平・市嶋典子

グローバリゼーションの「ひずみ」が世界に広がっている。異なるモノを排除し、自国の利益をすべてに優先する動きは、言語教育が目指してきた異なる価値観の受容や対話という理念を覆す動きに向かっていくようにも見える。その一方で、言語教育は、社会や他分野への準備教育として位置づけられてきており、日本語教育もまた、外国人のみを対象とした日本語の教育が、社会のメインストリームから離れた教室の中で、専門家のみが知る方法によって、個別に実施されるという構図におかれたままである。「公共性」をこれら「分断」「私的」「個別的・一面的」に利益（公益性）を追求することへの対抗概念として位置づけることで、市場原理に回収されない言語教育のあり方を構想する。

（細川一言語文化教育研究所，牛窪一関西学院大学，三代一武蔵野美術大学，市嶋一秋田大学）

学部段階の日本語教育と理工系専門教育との効果的な連携

—数学教育・物理教育とのコラボ授業事例から—

太田亨・佐藤尚子・菊池和徳・藤田清士・村岡貴子

本パネルでは、論理的思考力養成のため日本語教育が理工系専門教育とどう連携していくべきか、数学教育と物理教育の例を通して考察する。パネル立案者らは、日韓共同理工系学部入学前予備教育に携わる過程で、日本語教育と数学教育・物理教育のコラボ授業を実施してきた。物理授業後にアンケート調査を実施したところ、コラボ授業を実施・改善した結果、専門用語を取り入れた漢字学習法が両者の学習を促進する一つの方法として有効と受講学生に評価された。しかし、数学教育とのコラボ授業については、実践方法と授業改善に関する報告があるものの、評価はまだ出していない。そこで本パネルでは、日本語教育と数学教育・物理教育のコラボ授業をめぐる、発表者それぞれの専門の立場から狙いや工夫点、有効性等についてまず討論を行う。その後フロアを交えて、より効果的な連携方法をめぐり議論を深めていく。

（太田—金沢大学，佐藤—千葉大学，菊池・藤田・村岡—大阪大学）

日米豪韓における「会話データ分析」の研究成果と教育現場への活かし方を探る

—文献調査とインタビュー調査をもとに—

中井陽子・大場美和子・宮崎七湖・尹智鉉

本パネルセッションでは、会話データ分析でどのような研究が行われてきているのかを探ると共に、会話データ分析を行う教育者・研究者の研究と実践の軌跡を探り、今後の会話データ分析の「研究と実践の連携」のあり方を議論する。

まず、日米豪韓の日本語教育関連の学会誌等に掲載されている会話データ分析論文の特徴を年代別に調査した結果を報告する。次に、会話データ分析を行い、社会貢献を行ってきた教育者・研究者にインタビュー調査を行った結果を報告する。

以上から、今後どのような会話データ分析を行い、「研究と実践の連携」を行えるのか議論する。さらに、インタビュー調査をまとめた教材を大学院の日本語教員養成コースで使用し、そこで課したレポートを分析した。この分析より、大学院生が教育者・研究者の築いてきた研究と実践の軌跡から何を学び、自身の研究と実践に活かそうとしているのか考察し、今後の教育者・研究者養成のあり方も議論する。

（中井—東京外国語大学，大場—昭和女子大学，宮崎—新潟県立大学，尹—早稲田大学）

「地域日本語教師」養成のためのプログラム開発と講座実施から見てきたこと

—「ともに社会をつくる仲間」という視点から—

嶋田和子・内山夕輝・坂本勝信・白皓

A市は、増加する外国人住民に対応するために、市民ボランティアを養成し日本語学習支援体制作りを進めてきた。しかし、日本語学習者の多様化と永住化が広がり、交流を中心とした学習支援の場だけでなく、日本語学習を保障する場も求められるようになり、その担い手の育成が新たな課題となっている。A国際交流協会では、2010年度文化庁委託事業「生活日本語の指導力の評価に関する調査研究」報告書を基盤とし、A市における地域日本語教師育成のため、2015、2016年度に文化庁の委託を受け「A版地域日本語教師養成講座」を開講した。

本発表では、受講した日本語教師らが、地域住民や地域日本語教室と関わることで、いかに地域の現状を理解したのか、また、多様な人との対話を通してどんな学びがあったのかについて述べる。今回の結果は、地域日本語教師の資質・能力についてのみならず、地域日本語教育のシステム構築についての検討にも役立てられるものだと考える。

（嶋田—アクラス日本語教育研究所，内山—浜松国際交流協会，坂本—常葉大学，白—南山大学大学院生）